

－特定非営利活動法人 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ－

活動マニュアル

登別アクティブガイド協会(B-NAG)

Bank of Noboribetsu Active Guide

2010/03/14

安全はすべてに優先する。リスクへの気づきは安全な活動につながる。

－NPO法人モモンガくらす活動マニュアル－

1 企画段階における安全対策

企画段階においては、目的を明確化するとともに、安全に対する意識をもって、日程、プログラム内容、対象者、指導体制、用具・装備、緊急時対応などについて検討する。天候や交通事情などによる突発的な計画変更にも対応できるよう、複数のプログラムを用意するなど、活動に無理が生じないような計画を立案する。

2 事前準備段階における安全対策

(1) 下見（実地踏査）について

事前の下見は、参加するスタッフが先行し、下記の内容を確認する。必要な場合は活動場所や危険箇所などの写真、撮影を行い、活動場所の情報を得る。

① 安全な場所の選定

活動場所が、目的や活動内容に合致しているか、予定している参加者（年齢、体力、人数、能力など）に合うものかどうかを見極めて、場所の選定をする。この際、必要な情報収集をする。

② 危険な箇所などのチェック

参加者の目線を意識して、複数で危険箇所のチェックを行う。

参加者目線で危険箇所のチェックを行う。

危険箇所に加えて、当日の活動範囲や監視体制、荒天時の緊急避難場所や避難ルートもあわせてチェックし、また、危険箇所なども把握する。

② 病院・消防署などの把握

万が一のために、緊急連絡一覧を作成するため、活動場所周辺の病院や消防署などの連絡先を把握しておく。同時に、連絡方法、運搬手段、活動場所からの所要時間、携帯電話の電波事情などをチェックする。

(2) 下見を踏まえての計画の見直し

下見を行うことで、企画段階では気づかなかった危険箇所や、必要な安全対策（指導体制・組織、用具・装備など）が出てくる場合は計画を見直す。この際、責任者、対応スタッフでの会議を開催し、計画について話し合う。

(3) 指導体制について

参加者が少人数の場合でも、スタッフは2人以上が原則である。また、事業の実施にあたっては、スタッフの役割分担を明確にするとともに、必要により警察や消防などと連携を図る。場合によっては、関係箇所に行動計画書の提出を行う。

主催者、現地本部、指導班、監視班、救護班、渉外班などを明確にする。

(4) 参加者および保護者に対する説明（事前説明会）の開催

必要により事前説明会を開催する。

事前説明会では、活動の目的・内容、持ち物・服装、指導體制、指導責任と保険などについて参加者および保護者に説明を行う。

① 参加者への説明

ア ルール・マナーの遵守

法律や集団の規範・約束事、そして道具の扱いに至るまで、安全を確保し快適に活動するためのルールやマナーをあげ、参加者が遵守するよう徹底する。

イ 安全に対する意識づけ

活動の多くは、非日常的な自然環境の中で行われるものである。従って、日常的に予想される危険とはかなり異なる。指導者・スタッフが作成した危険箇所の一覧をもとに、参加者の安全に対する意識が高まるように指導する。

ウ 自己責任の意識づけ

「自分の身の安全は自分で守る」参加者のレベルや発育発達段階にあわせて意識を促す。

② 保護者への説明

ア 安全に対する意識づけ

保護者に活動場所や内容を知らせる際に、各家庭においても子どもに対して、危険箇所などを意識し安全に十分気をつけて参加するよう依頼する。

イ 保護者の責任

保護者には、活動の趣旨、内容などを理解し同意した上で子どもを参加させる責任があることを説明する。なお、保護者は子どもの参加に際して、子どもがもつ持病や食事制限、アレルギーなどの配慮すべき情報および参加当日の健康状態など報告を得ること。

(5) 参加者の情報および特徴の把握（個人調査票の作成）

① 参加者の情報の把握

参加申込書、同意書、健康調査書などの参加者の情報を事前に把握しておくことが必要である。特に、対象が子どもの場合、持病や食事制限、アレルギーおよび常用している薬などについても情報を把握しておく。

② 参加者の特徴の把握

ア 参加者の体力・能力

自然体験活動では、実際に身体を動かす活動が含まれるため、参加者の基礎的な体力や運動能力、活動技術レベルについて確認が必要な場合がある。体力・運動能力に関しては、参加者のレベルに応じた無理のない計画を立て、実施場面では、弱者にあわせて行動することが大原則である。また、参加者の中に障害がある人が含まれていたり、けが人と共に活動したりするような場合は、十分な対応と配慮ができる準備（スタッフ、用具など）をしておく。

イ 参加者の行動・態度

集団活動を進める場合には、ルールやマナーを守ることが重要である。ルールや公正さを無視した行動や、自分勝手などの逸脱行動は、事故やトラブルに発展する可能性があることを認識しておく。

ウ 参加者の意識・感情

参加者が不安や悩み、緊張などの意識や感情を長くもっていたり、度を超したりしている場合は、非常に危険である。

(6) スタッフに対する指導とリスクマネジメント意識の向上

① ミーティングなどを通じて、役割分担を明確にし、コミュニケーションが十分とれるようにしておく。

② 危険に対する意識づけ

自然体験活動中に想定される危険には、次のようなものがある。

- ・熱中症や日射病が原因（高温度、直射日光など）
- ・動植物が原因（クマ、ヘビ、ハチ、ウルシ、毒草・毒キノコ、クラゲ、ダニなど）
- ・気象条件が原因（天候の急変、落雷、台風、洪水、吹雪、雪崩など）
- ・地理的条件が原因（転落、落石、急斜面、岩場、尾根、山頂など）
- ・水的条件が原因（水温、水深、水流、潮流、低体温など）
- ・活動技術が原因（溺れる、迷う、転ぶ、落ちる、挫くなど）
- ・用具の操作技術が原因（切り傷、やけど、刺し傷、爆発、一酸化炭素中毒など）
- ・疲労や心的要因が原因（判断ミス、パニック、過度の興奮、疲労凍死、低体温など）
- ・健康状態と衛生管理が原因（発熱、下痢、食中毒など）

このほかにも、想定できる限りのあらゆる危険についてスタッフの中で出し合い、一覧にする必要がある。それをもとに、スタッフの危険に対する意識が高まるように指導する。

③ 危険箇所の確認

下見で撮影した写真やビデオを利用するなどして、スタッフ全員が危険箇所などを把握する。

④ 事故対処トレーニングの実施

緊急事態が起きた場合、冷静に対応できるよう、スタッフ全員がマニュアルについて理解しておく。万が一の場合に備えて、事前に確認し、事故を想定したトレーニングをしておく。

⑤ 救急法・救急処置トレーニングの受講

いざという時のために、指導者やスタッフは消防署や日本赤十字社などで実施している止血法、心肺蘇生法などの救急処置トレーニングを最低2年に1回は受けること。また、防災訓練などへも積極的に参加すること。

(7) 用具・装備について

用具・装備については、対象者に適しているか、不具合がないかを点検しておく。緊急用の用具・装備、救急箱（応急用の薬など）も用意または手配する。また、使用方法についても熟知しておく。

(8) 緊急時の対応について

緊急時の内部連絡、家庭への連絡、警察、消防、病院の連絡先、診療時間などの確認など緊急時のマニュアル、連絡体制をつくる。また、必要な備品をそろえるなどしておく。

(9) 保険の加入について

傷害保険や賠償責任保険などへの加入をする。

(10) リスクマネジメントについて

スタッフは危険予知イメージトレーニング実施する。

- ① 危険の発見：「どんな危険がかくれているか」
- ② 特に危険なポイントの発見：「これが危険のポイントだ」
- ③ 具体的な対策の検討：「私ならこうする」

- ④ 行動目標の決定：「私たちはこうする」という段階をへて、危険予知および危険回避の能力を高める。

3 実施段階における安全対策

(1) 気象状況の把握と事業の取り扱いの判断

活動場所に到着したときには、最新の予報について十分に情報を収集する。また、活動日以前の気象状況についての情報も収集する。それらの情報を総合して、事業の実施、継続が妥当かどうかについて、勇気をもって決断する。

(1) 気象状況に応じた対応

- ア 警報や注意報が発令されていないかを確認する。
- イ 大雨警報や雷警報が出ている場合は、野外での活動は中止・延期する。
- ウ 雷に対する安全対策
 - 落雷の予兆
 - ・積乱雲が成長する様子が見えたら、落雷の危険がある。
 - ・「ゴロゴロ」と雷鳴がかすかにでも聞こえ始めたら、降雨の前に落雷の危険がある。
 - 安全な場所への避難
 - ・十分安全な場所は、コンクリートの建物、戸建て住宅、自動車、洞窟の奥などである。
 - ・危険な場所は、テントの中、ビーチパラソルの下などであり、雨宿りは厳禁である。
- エ 大雨に対する安全対策
 - 川の増水と土砂崩れに注意が必要である。常に水位に気をつけ、雨が降っていなくても水量が増えてきた場合は、活動をやめて避難する。
 - 川の水が一時的に引いた場合は、上流でせき止められた可能性がある。せきが決壊したとたんに土石流が襲ってくる可能性があるため、即座に避難する。

(2) 危険箇所の再確認

危険箇所については、下見および企画の段階で確認しているが、下見のときの情報以上に当日の様子を再度確認する。

必要な場合は、危険箇所を表示するなどして、参加者の注意を喚起する。

天候などに応じて活動の中止や変更はあり得るが、活動内容を変更する場合も、予定していない活動を行うことはしない。

(3) 用具・装備の再確認

通常使う用具・装備だけでなく、緊急用の用具・装備があるかどうか、使用可能かどうかの確認も行う。トランシーバーや無線、携帯電話などの通信機器の確認もしておく。

(4) スタッフの役割分担・緊急時の対応についての再確認

緊急時の対応マニュアル、連絡体制をスタッフ全員が理解し、万が一の時に敏速かつ潤滑に対応できるようにしておくとともに、マニュアルや緊急連絡先などの設置場所を周知しておく。

また、必要により、活動地周辺の警察・消防・医療機関などとも連携が取れるようにしておく。

(5) 参加者の状況把握

① 人数の確認

活動すべての基本になることなので、指導者が、責任をもって行うこと。

② 健康状態

活動に入る前に、参加者の健康状態（睡眠、排便、食欲など）について確認する。
参加者には、いかなる体調変化もすぐに申し出るように伝えるとともに、参加者が体調不良などを訴えた場合は、その後の活動への無理な参加は控えさせるようにし、保護者へも連絡をする。またこのような場合、参加者は少々無理をしてでも、継続して参加したいと意思表示することがあるが、適切な判断により、活動への参加の可否を決めるようにする。

③ 心の状態

様々な関わり合いや活動の中で、心の状態が不安定になっている参加者がいないかどうか注意し、活動を無理強いしないように配慮する。

④ 服装など

自然体験活動では、それぞれの活動に適した服装や装備が必要である。指導者は、事故などを未然に防ぐためにも、屋外での帽子の着用や活動に適した服装などについて指導する。

別紙

安全管理チェックリスト

(1) 企画段階における安全対策 (20項目)

下見(実地踏査)について

- 安全な場所を選定したか?
- 危険な場所などのチェックはしたか?
- 病院・消防署などの把握はしているか?
- 指導体制・組織について
- 指導者・スタッフの人数は十分か?
- 専門家、経験者の意見は聞いたか?
- 活動場所周辺の警察・消防・医療機関との連絡体制はとれているか?
- 活動に必要な知識、技術、経験をもった指導者・スタッフがいるか?
- 活動内容に応じて、必要な資格をもった指導者・スタッフがいるか?
- 緊急時の対応について
- 緊急対策マニュアルは作成したか?
- 緊急連絡先一覧は作成したか?
- 緊急時の用具・装備について
- 救命具、救助用具(活動内容や活動場所に適したものなど)は用意したか?
- 通信用機器(トランシーバー、無線、携帯電話など)は用意したか?
- 非常用食糧は用意したか?
- 救急箱(応急処置用の薬など)は用意したか?
- 計画全般について
- 日程・時間・プログラムは余裕をもって無理なく計画できているか?
- 対象者は日程・プログラムに無理のない設定になっているか?
- 天候や交通事情などに対応できるよう、代替のプログラムは用意しているか?
- 活動に必要な用具・装備の点検はしたか?
- 移動手段には無理がないか?
- 保険に加入したか?

(2) 事前準備段階における安全対策 (19項目)

指導者・スタッフに対して

- 役割分担は明確にできているか?
- 危険に対する学習はしたか?
- スタッフ全員による危険箇所の確認はしたか?
- 事故対処トレーニングの実施はしたか?
- 救急法・救急トレーニングの受講はしたか?
- 参加者に対する説明について
- 各自の詳細な行動計画を説明したか?
- ルール・マナーの遵守について説明したか?
- 指導者・スタッフの指示に従うことや許可を得てから行動しなければならないことを説明したか?
- 危険に対する説明はしたか?

自己責任に対する説明はしたか？

保護者への説明について

- 危険に対する説明はしたか？
- 保護者の責任について説明はしたか？
- 保険に関する説明はしたか？

参加者の情報の把握について

- 緊急時の連絡先は把握できているか？
- 持病、アレルギー、食事制限などについては把握できているか？

参加者の特徴の把握について

- 体力・能力について把握しているか？
- 行動・態度について把握しているか？
- 意識・感情について把握しているか？

危険予知トレーニングについて

- スタッフを含む参加者全員での危険予知トレーニングは実施したか？

(3) 実施段階における安全対策 (21項目)

実施直前の確認について

- 気象状況について把握しているか？
- プログラムおよび活動内容の再確認は行ったか？
- 活動場所および危険箇所の再確認は行ったか？
- 活動に必要な用具・装備の再点検はしたか？
- 指導者・スタッフの役割分担は再確認したか？

緊急時の対応について

- 緊急時の体制、役割は再確認したか？
- 緊急連絡先一覧は再確認したか？
- 緊急時の用具・装備について
- 救命具、救助用具は確認したか？
- 通信用機器（トランシーバー、無線、携帯電話など）は確認したか？
- 非常用食糧は確認したか？

参加者の把握について

- 事業開始時に人数の確認は行ったか？
- 移動時の休憩後に人数の確認は行ったか？
- 到着時に人数の確認は行ったか？
- 活動開始時に人数の確認は行ったか？
- 活動終了時に人数の確認は行ったか？
- 健康状態はチェックしたか？
- 心の状態はチェックしたか？
- 服装などに対して指導したか？

指導者、スタッフについて

安全についてチェックしたか？

健康についてチェックしたか？

事業の継続について

総合的に判断して事業は継続できるか？